

# 寧夏自治区東部貧困県の平均的回族家庭の生活状況について

## -呉忠市塩池県のヒアリング調査から-

大西 広

### はじめに

中国においては一般に朝鮮族を除くすべての少数民族は農業など低生産性部門の就業につき、それが少数民族地区においては民族間の経済的地位の格差を生み出し、さらにはそれが時に「民族問題」として認識されている。この「民族問題」は現在こそ高度成長という全般的な生活改善によって特に激化することなく推移をしているが、いずれやって来る成長の停止期において激化する可能性は大きい。そのため、この問題は事前によく調査・対応しておかなければならない。

以上のような問題意識の下で、筆者は以前に新疆ウイグル自治区の貧困地帯=少数民族比率の極めて高い地区の農家調査を行ない、その統計的な分析結果を大西他(2005)にて発表した。これに続き、もうひとつの中国のイスラム教自治区である寧夏自治区の貧困地区で行なった調査の報告が本稿の目的である。今回は5軒の家庭へのヒアリングでしかないので、統計分析はできないが、それでもいくつかの興味ある実態を理解することができた。

### 調査に先立つ問題意識

その調査の対象として選択したのは、国家レベルの貧困県に指定されており、かつまた少数民族地域である呉忠市塩池県馬記溝郷である。新疆自治区の場合はタクラマカン砂漠南縁の純粋な農業地域であったが、この郷は牧畜と農業を本来の産業とする地域であり、これは今回は砂漠の緑化を「退耕還草」として行なっている牧畜の実態も調査したいと考えたからである。

しかし、これと同時に、新疆自治区の少数民族農家の貧困問題として前回調査が明らかにした諸点が今回の寧夏調査ではどうなっているかにも注目した。具体的には、新疆調査の結果である i)農家経営における土地面積の重要性、ii)労働力の過剰状況、iii)扶養家族の重圧、iv)農民層の分解、v)労務輸出と地元の工業開発・観光開発などの農外所得の重要性、vi)子どもの教育の重要性、が塩池県馬記溝郷ではどのようになっているかを調べたいという目的を設定した。総じて言えば、新疆自治区の調査地では、農業所得は土地面積に決定的に依存しており、それに見合った労働力以上の労働力や扶養家族は家計の負担となっていた。そして、この解決は農外所得以外にない状況にあり、よってそうした努力がちゃんとされているかどうかの問題となる。これは「農家」の話ではないが、当該地区の一部和田市を訪問して感じたことは、観光客が集まるホテルの両脇にある少数民族経営の食堂では漢字表記もなく漢語が通じない、そしてそこに集まるタクシーも漢語が通じないというのは彼らの努力不足ではないかということであった。したがって、こうした新疆貧困地区の状況との異同が今回調査の目的となった。

さらにもうひとつ、統計的に知られる寧夏自治区の状況から予想される他地域との異同についても確認したいという目的があった。先の大西他(2005)論文の時と同様、寧夏自治区を中国にある他の少数民族自治区や四川、重慶、貴州、雲南、甘肅、青海各省内の少数民族集住地区(ここではこれらを合わせて「少数民族集住地区」と呼ぶ)と比較してその持つ特徴を温軍(2003)が示した諸表を基にまず示しておきたい。第1表がその要約であり、特に他の少数民族集住地区と比べて以下の特徴のあることが分かった。すなわち、a)農村人口・農民人口の比率が低いという人口構造を反映して、乳児死亡率、一人当たりGDPといった基本的な指標は他の少数民族集住地区より良い、しかし b)農村住民に限ると一人当たり収入が他の少数民族集住地区より悪く、それが全体としての貧困発生率や一人当たり消費水準、0歳児の平均余命といった指標での比較劣位をもたらしている。c)その影響で非・半識字比率や小学校就学率といった基本的な教育水準に問題が生じているが、他方で科学技術人員の人口比率、大学・高専卒業生比率といった点では比較優位となっている。つまり、これらを総合すると、回族の中で貧困が問題となるのはその農村住民、農業従事者であることが分かる。回族は都市でレストラン業などを営み、農民人口比率は比較的少ない。これが彼らの比較優位のいくつかをもたらしている。が、これは逆に言うと、都市に住む回族と比べて農村に止まる回族の立ち遅れの問題を生じさせていることになる。我々の調査は農村であるから、そのように立ち遅れた部分の回族の状況を調査していることになる。

第1表 寧夏自治区の他の少数民族集住地区との比較

	寧夏自治区	全国少数民族集住地区平均	内地漢民族集住地区	全国平均
貧困発生率	18.4%	15.0%	7.3%	11.3%
乳児死亡率	15.34%	32.34%	12.68%	17.87%
0歳児の平均余命	62.59年	64.71年	69.83年	69.80年
農村人口比率	70.2%	77.8%	71.7%	73.2%
農業人口比率	58.7%	64.0%	45.9%	50.1%
一人当たりGDP指数	72.4	66.1	111.6	100.0
一人当たり消費水準	58.6	69.8	110.4	100.0
農村住民一人当たり収入	59.2	76.8	108.7	100.0
千人当たり科学技術人員数	29.00人	20.95人	25.45人	24.30人
15歳以上人口に占める非識字・半識字比率	23.32%	18.69%	14.01%	15.14%
小学校未就学者比率	18.34%	15.16%	11.23%	12.23%
大学・高専卒業生比率	2.93%	2.10%	3.11%	2.85%

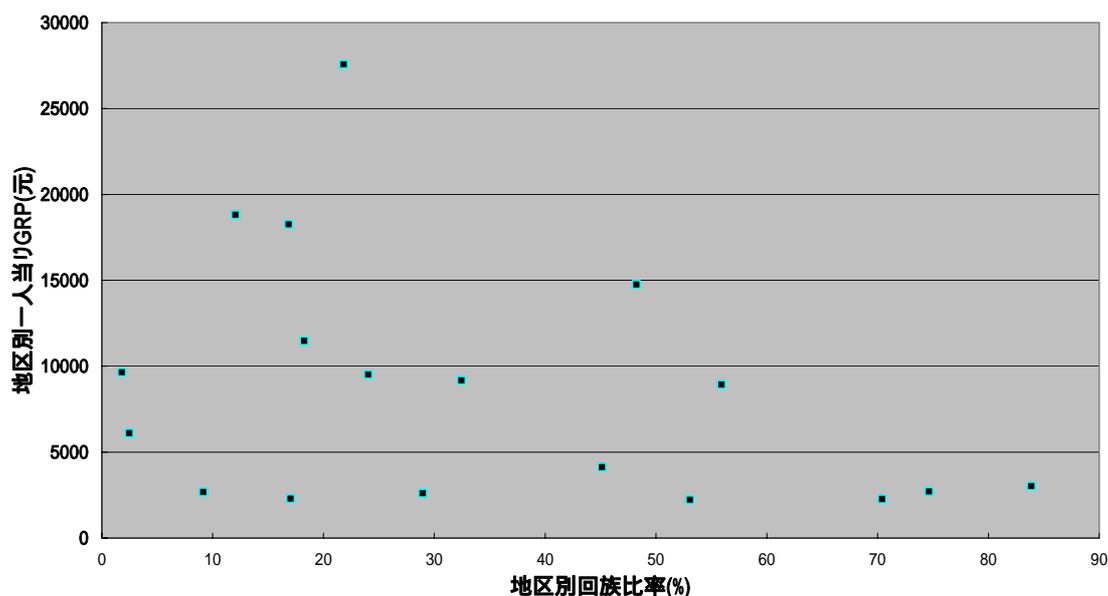
注)「貧困発生率」は康暁光『中国貧困与反貧困理論』1995年、「乳児死亡率」および「0歳児の平均余命」は『中国人類発展報告』1999年、「耕地面積比率」は中国科学院自然資源総合考察委員会『中国農業自然資源数拠匯編』1980年、「農村人口比率」、「農業人口比率」

「一人当り GDP 指数」、「一人当り消費水準」、「農村住民一人当り収入」、「15 歳以上人口に占める非識字・半識字比率」、「小学校未就学者比率」、「大学・高専卒業生比率」および「千人当り科学技術人員数」は『中国統計年鑑』2000 年、出所)温(2003)掲載の各種の表より整理。

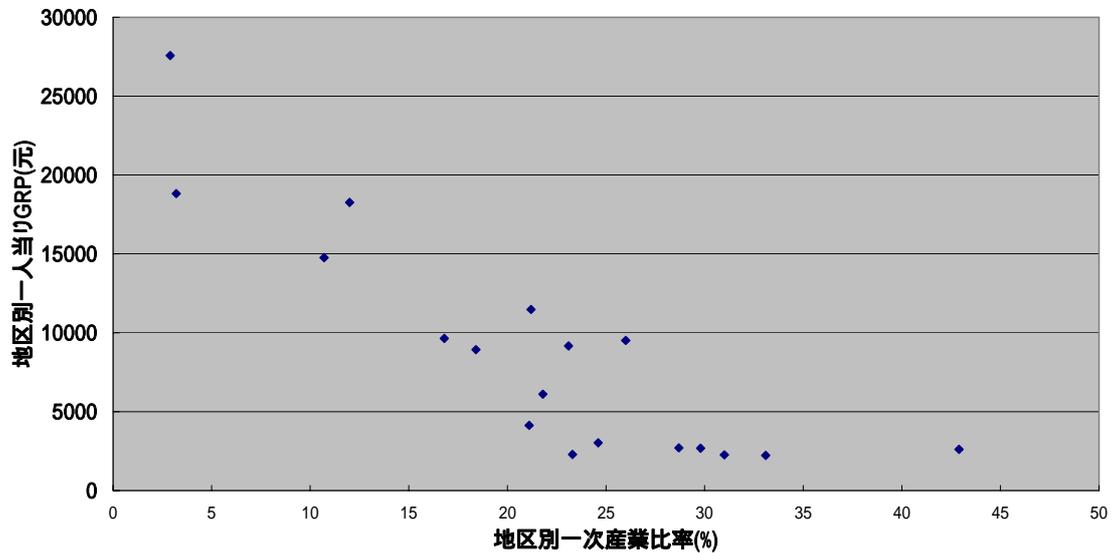
この状況をより明確にするために『寧夏統計年鑑 2006』に掲載された 2005 年のデータでまず作ってみたのが次の第 1 図である。これは、各県旧都市の回族人口比率と一人当り GRP(地域総生産; Gross Regional Product)の関係を見たもので、まさに本自治区回族の他民族と比べた生活状況を推し量ることを目的としている。民族間の経済格差を直接に表す統計がないために、この方法でしか民族間の所得格差を示せないがための代替措置であるが、ここでは全体に回族比率の高い地区ほど一人当り所得が低いことを伺わせるとしてもその相関はかなり緩いものとなっていることが分かる。

しかし、他方でこうした民族比を離れて地区別総生産に占める一次産業比率を一人当り GRP の間の関係を見ると、第 2 図のように綺麗な相関を見せているから、この両図を考え合わせるとやはり農業・牧畜業の所得は他産業に比べて明確に低く、産業間の格差は明確であるが、回族は農牧畜民、漢族は商工業者というような民族別に産業が別れていないので民族間の所得格差はやや不明瞭(緩やかなもの)になっているということになる。あるいは、これをもっと明確に言い切ると、農村の回族は貧しいが都市の回族はそれほどでもないことになる。つまり、こうして、「回族の貧困」とは、実はその民族固有の貧困ではなく、「農民の貧困」と考えるべきであることを示している。

第1図 寧夏自治区地区別回族比率と一人当りGRP



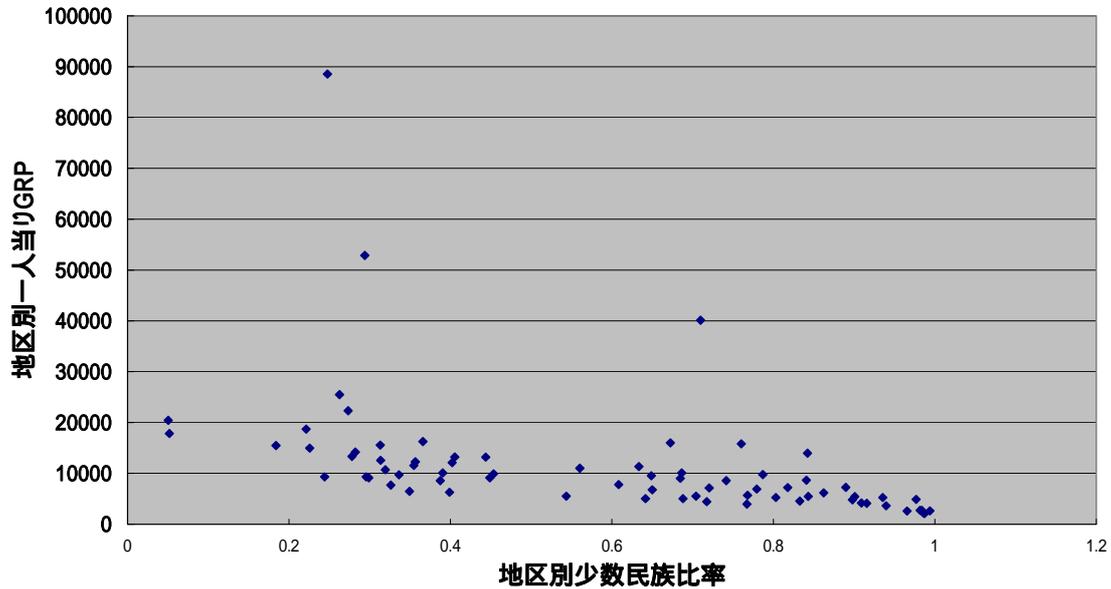
第2図 寧夏自治区地区別一次産業比率と一人当りGRP



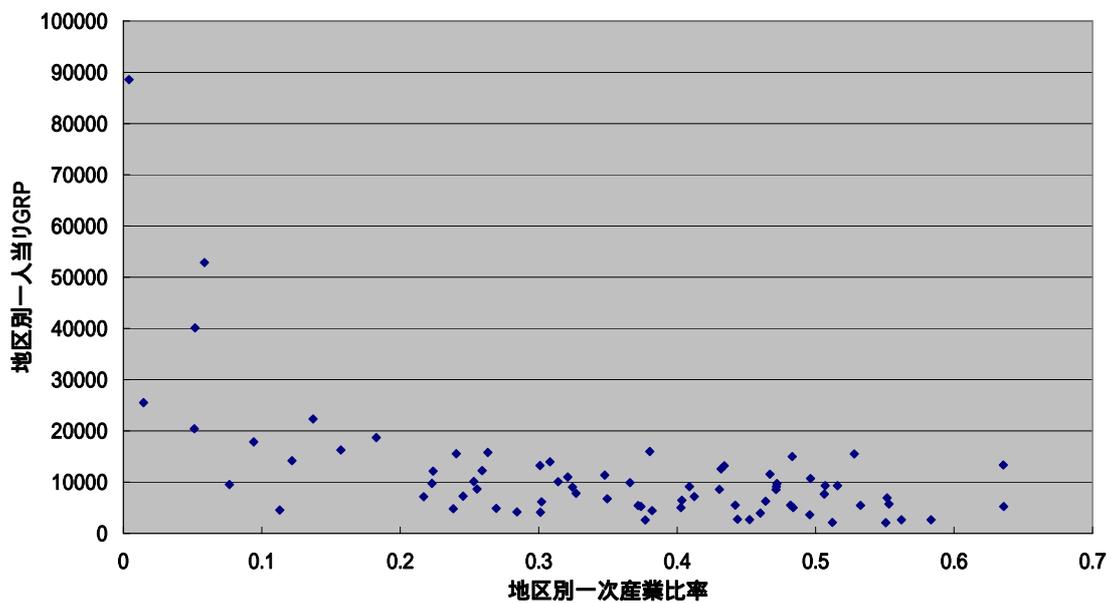
このことは、実は、新疆ウイグル自治区との対比の中でより明確に示すことができる。というのは、『新疆統計年鑑 2006』のデータで同様に作った第 3,4 図<sup>1</sup>を見ていただければ分かるように、新疆自治区では両グラフの相関の強さが寧夏自治区の逆となっているからである。図では明確でないかも知れないが、これは第 2 表のように相関係数を示せばはっきりする。つまり、究極の問題たる所得格差は、新疆自治区においては直接に民族格差の問題として存在するものが、寧夏自治区においては直接には産業間格差の問題としての性格をより強く持っていることが分かるからである。

<sup>1</sup> ただし、実はこのグラフにはカシュガル地域のデータが含まれていない。これは『新疆統計年鑑 2006』にこの地区の一次産業比率や一人当りGRPが掲載されていないためである。掲載されていない理由は不明である。

第3図 地区別少数民族比率と一人当りGRP



第4図 新疆自治区地区別一次産業比率と一人当りGRP



なお、この点はとくに第 2 表の一番右の列の数字でより鮮明になっている。これは、第 3,4 図で突出した一人当り GRP を示している 3 つの地区(ウルムチ市、シャンシャン県、コルラ市)を除いて計算したものである。この特異値を排除することで他の一般的な地区の特徴がよりよく表現され、それによってさらに新疆では所得格差が産業的なものではなく民族的なものであることがより明瞭になるからである。

第 2 表 地区別一人当り GRP 格差に何がより関係しているか-寧夏と新疆の比較-

	寧夏自治区	新疆自治区	3 地区を除く新疆自治区
回族/少数民族比率と一人当り GRP との相関	-0.377	-0.458	-0.748
一次産業比率と一人当り GRP との相関	-0.865	-0.557	-0.520

したがって、これらの事前の問題関心を全体としてまとめれば、砂漠の緑化と農牧業との関係、「退耕還草」による農地縮小の影響、労働力の過剰状況と副業ないし労務輸出の状況、教育問題、都市と農村の問題、といったところとなる。こうした問題意識を持って行なった調査の概要は以下のとおりとなった。

### 寧夏自治区吳忠市塩池県での貧困調査の概要

それで、本題の調査の内容に入るが、ここでは調査対象の吳忠市塩池県馬記溝郷の 5 つの村の「標準的」な家庭を選択し、ヒアリングをするという形式でおこなった。この地区の 2006 年における一人当たりの年間純収入は平均で 2200 元である。そのため「標準的」とは、ほぼこの程度の所得を得ている家庭を意味している。少数のヒアリングしかできなかったため、このような方法をとった。また、塩池県自体は少数民族比率が少ないが、訪問した 5 つの村は大多数が回族的村を選択している。具体的には、その 5 軒のヒアリング結果は以下のようなものであった。

#### 1) 岔岱村 農民 回族

- ・一家の一人当たり年間純収入は 2000 元。これで生活は良くなった。
- ・収入は、農業、牧畜業、出稼ぎからなり、農業は旱魃で縮小。よって牧畜業の収入の方が多く、羊 100 頭を飼っている。この地では「中の上」の頭数であり、禁牧ゆえに草は他から買っているが、禁牧の影響はそう大きくない。出稼ぎ先は塩池県内の高速道路建設で家族五人のうちの息子二人が行っている。娘は他の仕事に行っている。総収入に占めるこの比率は上昇している。
- ・息子 2 人は高校に合格しなかったため進学しなかったが、娘は進学して今は清華大学に通って電子工学を学んでいる。清華大学は重点大学なので学費は寧夏政府が毎年 5000 元補助してくれている。来年からは大学院に進む。

#### 2) 苦水村 農民 回族

- ・この村の生活水準は、去年は 2280 元となり、以前よりだいぶよくなった。  
この家も以前は土の家に住んでいたが、97-8 年建替え、に今はレンガの家に住めるようになった。
- ・農業収入は減ったが、牧畜収入と副業収入で暮らしている。副業としては息子夫婦が付近の石炭掘りの手伝いに出て収入増となっている。この村だけでも石炭掘りの機械が 11 台設置されていて、これが 33 人の雇用を作り出している。苦水村の人口は 267 人なのでこれは大きい。また、他地区の石炭掘りにも出ている。毎日出れ

ば月 1000 元余りの収入となる。

- ・ 家族は九人。
- ・ 退耕還草は農業労働力一人につき一ムーできて、それに年 200 元の補助が降りる。この家庭は 5 人なので 1000 元をもらっている。
- ・ 禁牧の影響もそう厳しくない。また、草地化もうまく進んでいる。
- ・ さらに収入が増えれば、息子夫婦の部屋を買いたい。また、教育費にも使いたい。
- ・ この村はコミュニティーとして結束している。

### 3)強記灘村 建材販売業 回族

- ・ 一家の一人当たり純収入は 2300 元。中の上に位置する。
- ・ 呉忠市から買った建材の小売りをしているが、近年皆が家建て替えるようになり儲かって来ている。今後は石炭掘りに関わる事業などで規模を拡大し、この村を出て「郷」レベルの建材市場を計画。そこに店を持ちたい。それには資金が必要であるが、そのために信用社からの借用を考えている。

### 4)老莊子村 羊皮取引業 回族

- ・ 一家の一人当たり純収入は 2100 元。2 人家族。
- ・ 郷の市場や村人から羊皮を買取り、ためてから再び市場で大商人に売る仕事をしている。いつも大体 200-300 枚保有し、季節変動によって普通は一枚 40-50 元、50-60 元、70-80 元という価格がつく。ただし、一枚 200 元を超えたこともあった。毎年物価は上がっているが、利益率は一枚当り 3-5 元で変化がないが、取引する枚数は増えているので収入は増している。こういう商人は各村にいる。利益率をさらに上げるには投資が必要。
- ・ 禁牧は生態に良い影響を与え、また補助金もあって良いことだ。他にも良い政策をしてくれるので政府に不満はない。郷の書記は漢族だが問題ない。以前は回族の書記であったが・・・。

### 5)南灘村 農民 回族

- ・ 一家の一人当たり純収入は 2000 元。5 人家族。
- ・ 新品のテレビやオーディオセットがあり、それを示して生活水準は良くなったと説明。
- ・ この村は計画移民による村なので各戸の土地が広く、そのため副業はしていない。本来の農業収入は雨不足で激減。ただし、退耕還草の保障金があり、合わせると所得全体の 30%を占める。牧畜業収入は全体の 70%。これは今年の羊肉価格の上昇(去年の 8 元から 15 元に)によるもの。飼料のトウモロコシ価格も 6 元から 8 元に上昇したが、この上昇率は相対的に低いので牧畜業収入が増えている。つまり、農作物価格と牧製品価格との価格上昇率の差が農業収入と牧畜業収入の比率を決めている。
- ・ 子供は息子 2 人、娘 1 人で、それぞれ中学と高校に通っている。高校卒業後は大学

入学も期待している。合格してくれるならばその時は全力でお金を払う。回族もこうして教育を重視している。

なお、塩池県県城からとったタクシーの運転手と郷の党書記からとった情報も非常に興味深いものであったので追加でレポートすると次のようになる。すなわち、

#### 6)塩池県城 タクシー運転手 漢族

- ・ 月 3000 元の収入。同業仲間の半分はその程度の収入を得ている。
- ・ 以前はトラックの運転手であったが、4 万元で車を買ってタクシー業に転向した。今なら 6 万元かかる。
- ・ タクシー業者の殆どは漢族で回族は 5%程度。
- ・ この人物に言わせると  
「回族は商売などもっとしばられない仕事をし、タクシーのような着実な仕事をしない。」「回族は子供の教育を重視しない」

#### 7)塩池県馬記溝郷 党書記 漢族

- ・ 漢族の方が活動的で村を出て仕事をする比率が高い。漢族の村では 300 人の村民中 200 人が外に出て、女性と子供しか残っていないところもある。
- ・ ただし、回族があまり外に出ない理由のひとつには経営規模が大きく、また製塩などの事業もできるということがある。1 軒あたり 3 ムーあれば食事には問題がなく、10 頭の羊があれば収入に問題がない。最大の経営は 1000 頭以上を飼っている。更に出稼ぎと政府補助で現金収入は十分ある。
- ・ 塩池県は国家級の貧困県であるため、国家からの補助金がでている。お金以外にもテレビが国から配られ、MMTS というアンテナで衛星放送も見れる。また上水パイプも近く配られることとなっている。また、健康保険を 1 人当たり 10 元/年納めると最大 8000 元の支給がある。
- ・ 更に貧困家庭であれば、月単位で小麦粉と米が、年単位で食用油が、そして肉用の手当てまで支給している。
- ・ 調査した 5 つの村以外では、年間世帯単位で 50000 元の収入を得ているところもある。

### 調査結果が示唆するもの

したがって、以上の調査結果から我々が当初に設定した問題関心についてどのようなことが言えるかを整理すると次のようになるのではないだろうか。

まず、その最初の関心= 砂漠の緑化と農牧業との関係については、「禁牧」も「退耕還草」もが共に成功裏に進んでいることが分かる。実際、元々砂漠であった土地で草地化されたところを見せてもらったし、寧夏や内モンゴルで緑化が進んでいるとの話も聞く。た

例えば、現在、07年から08年にかけて日本で公開された中国映画の「白い馬の季節」は内モンゴルの砂漠化と禁牧による「還草」の下での人間模様をテーマとしていたが、その脚本ができた数年前には厳しかった砂漠化もこの施策によって終結し、実は砂漠化が進んでいる撮影現場を探すのに非常に困ったという話が残されている。これもまた、その傍証である。

そして、第二に、 の関心に関わっては、上記の緑化事業の手段としての禁牧や「退耕還草」による牧地・農地の縮小が家計収入にマイナスの影響を与えていないことも確認される。禁牧も「退耕還草」もそれによる農業・牧畜業収入の減少をカバーする政府補助金が十分に補償されており、このことは2)や5)の家庭の発言によって十分裏付けられている。2)の家計の発言では家族が多いほど「退耕」面積を拡大できて嬉しいというニュアンスが込められており、これにはこの補助金が馬記溝郷の一人当たり平均所得の6分の1がカバーするほどの金額であるということがある。禁牧自体にもまた別の補助金があるから、結局はこうした補助金が緑化事業を根本的には支えていることになる。そして、もし、この国家補助金が沿海部の経済発展のおかげによるものであるということにまで考えを及ぼすなら、要するにこうした緑化に関心を向けられるようになったのは中国が沿海部を中心に大きな経済成長を成し遂げた結果、あるいはその成果を中央政府がうまく配分した結果ということになる。

また、第三に、 の労働力の過剰状況・副業・労務輸出の状況については、禁牧や退耕還草による農牧業生産の余地の縮小があるので、ここでは一層重要であるが、それをまず可能としているのが、付近での高速道路の建設や石炭生産の拡大であるから、結局のところ、これもまた経済成長の成果の分配ということになる。ただし、漢族に比べればその「積極性」は強くなく、その理由を党書記に言わせると7)のように、回族の一戸当たり土地面積が大きいために出稼ぎの必要性が漢族より少ない、また3)の回族住民に言わせるとムスリムとしての食習慣/生活習慣の違いが他地域に出にくくしているということであった。このことは、出稼ぎ先として新疆があることにも反映されている。ただ、もっと本質的な積極性の問題である可能性もある。

さらに第四に、この問題とも関わるのは の教育問題である。これは、確かに1)の息子ふたりが高校に行っていないことから「教育軽視」というタクシー運転手の評価に納得しないわけでもないが、他方で娘が清華大学に行っていたり、5)の家庭のような態度もあり、本調査では必ずしも「軽視」と言えないということだろうか。この点は今後の調査がさらに必要になる。

最後に の都市と農村の問題は の対外的積極性の問題と関わる。それは、当初には農村に住んでいても、事業家として都市に移り住むというような者がいるからである。たとえば、 の建築材料商人は事業拡大で郷の中心に進出を希望し、また塩池出身の回族には油田開発やカシミヤ、ウールなどの取引きをする有限会社を設立した者もいると紹介してくれた。この郷に属する6つの回族村で他にこうした商売をしている者は羊皮商人[4]の商

人]と漢方薬商人ということであるが、そうした商人は皆事業拡大を望んでいるということであったので、そうした志向性を持つ住民が一定数存在するということになる。回族は全国にいて民族的ネットワークを形成していることにも 3)の建築商は言及したが、そのネットワークが都市を主に拠点としていることはほぼ間違いなからう。したがって、農村のみに限定すると他の少数民族集住地区に劣る回族住民たちの生活水準も、こうした「都市への進出」の流れの中で都市・農村を含む全体としては改善の方向性がさし示されている。

このことは新疆自治区のウイグル族との対比において大きな特徴となっている。というのは、ウイグル族は北部などで個人商業などをおこす者も多いが、総じてその事業を拡大し、資本家に上昇する者が非常に少ないからである。たとえば、新疆自治区の首都ウルムチ市でウイグル族の企業家がいるかと聞くと、誰々がそうだと回答が来る。これは企業家に上昇した者が圧倒的に少ないこと、つまり彼らの経済的ステータスの低さを示しており、さらに言うところこれが漢族への経済上の従属、引いては「民族問題」をもたらしている<sup>2</sup>。この意味で、少数民族によって何よりも重要なのは企業家を層として形成することであり、当地の回族はこの課題をある程度遂行していることになる。

以上より、不十分ながらも自身の経済的地位を上昇させようとする寧夏自治区貧困県の回族の努力の存在が析出された。冒頭でのべたように少数民族は自身の経済的地位の上昇を勝ち取ることなく「民族問題」を回避することはできない。そして、もちろん、こうした「民族問題」を発生させないことは、漢族の利益、漢族の課題でもある。今回は調査の対象数があまりに限られ、問題点の析出に止まったが、今後さらなる調査でより明確な結論を導きたい。

## 参考文献

大西広(2001)「中国少数民族問題への経済学的接近」『政経研究』第75号。

大西広、阿不里克木・艾山、阿不都外力・依米提、白石麻保(2005)「南新疆貧困地区における農家経営の実態について」『調査と研究』第29号

温軍(2003)『民族与発展 新的現代化追趕戰略』清華大学出版社

---

<sup>2</sup> 筆者がこの認識を最初に明らかとしたのが大西(2001)である。